
クロマグロ ～発動篇～

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロマゲロ ～発動篇～

【Nコード】

N8981B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

料理番組を駄目にした奴が、再び、帰ってきた。奴は、なんのため料理をする…。奴の名は、黒鮪くろまぐろ黒陰…。

（前書き）

今作には、下ネタが含まれていますので、不快に思われたら、この場で謝罪させていただきます。

僕は今日、体調が悪くて、学校を休むことにした。最近、雨降りが激しかったから、自己の体調管理がなつてなかったようだ。

そういや、以前、学校に行くのが嫌になり、わざとズル休みしたなあ…。あの時は、本当に、何事も嫌で仕方なかった…。そう考えていると、ふと、あることが思い出された。

「はっ！」

僕はベッドで横になっていたが、急に立ち上がり、テレビのリモコンを握った。

「皆さん、こんにちはー！『ツンデレ料理タイム』のお時間ですー！！」

テレビをつけると、むかつくくらいに明るいアナウンサーが、キッチンに立ち挨拶をした。

昼過ぎのこの時間は、ローカル局で、いつも料理番組をやっているのだ。

そして、僕は以前、この料理番組で信じられない光景を見てしまった…。

「今日のお料理の先生は…」

と、ブラウン管でアナウンサーが料理の先生を紹介しようとしていた。

まさか、あいつか…。あいつなのか！？

そう僕が、思っていると…。

「萌川料理学校講師の海野幸先生ですー！」

あれっ？

アナウンサーが、そう言うと、ポップな音楽に合わせ、かなり可愛

いエプロン姿の女の子がキッチンに現れた。

「こんにちはー！」

萌えーな、その先生は可愛く挨拶をした。

あれ、あいつは、どうしたんだ…。あの忘れもしない黒い男は…。すると…、アナウンサーの顔が急に暗くなった。

「そして、今日のメインゲストとして、もう一人、料理の先生に来てもらいました…」

えっ!?

アナウンサーから、明るさが消えた。

ま、さ、か、!、?

「濁汁料理学校講師…、黒鮪黒陰先生です…」

アナウンサーが、そう紹介すると、ポップな音楽が合わせ、長髪目の下のクマがヤバイ奴が現れた。

奴だ!!間違いない!!あいつだ!!

僕は自分が風邪気味だったのを忘れた。

奴は、キッチンの前に立ち…。

「こんにちは…」

あの魂に穴を空ける低く暗い声が、テレビから響く。

アナウンサーは、無理して笑顔を作り、挨拶を返す。

あの萌えーな感じの海野幸先生も、可愛く挨拶を返した。その様子から、彼女は黒鮪のことは知らないようだ…。

にしても、見事なまで、女の子講師と、黒鮪は合わないな…。

「アナウンサーさん…」

黒鮪は、アナウンサーに話し掛けた。

「あつ、はい…」

無理に笑顔を作って、アナウンサーは返事をした。

「こないだの放送（『クロマグロ』参照）のおかげで、僕、生まれ

て初めて、ファンレターをもらいました…」

おおっ、明るい話題だ。

「ええー、本当ですか!？」

アナウンサーが、それで自然な笑顔を取り戻し、明るく返答した。

「内容のほとんどが、『地獄に堕ちろ』でしたかね…」

アナウンサーの顔が凍る。海野先生も。

「あと、宛名が『黒鮪黒影』と、『かげ』の字を『影絵』の『かげ』と間違つて書いて送る人が居ます…。僕の名前の『かげ』は、『陰毛』とか『陰部』とか、いん…、ふがつ…!」

アナウンサーが、喋っている黒鮪の口をもぎ取るように掴んで黙らせた。すごい形相で…。たぶん、爪を立てている…。

海野先生は、冷やかな視線を黒鮪に送った。

「はい、では、料理を作ります…」

いきなり入ったCMが開けると、黒鮪の口に絆創膏が貼られていた。アナウンサーさん、気持ちは解るが、掴みすぎだ…。

あれ…、アナウンサーの姿がテレビから居なくなった…。黒鮪と、海野先生しか居ない…。

なにがあつた…。

「え…、今日は、海野幸先生が僕のアシスタントをしてくれるそうで…」

と、黒鮪は海野先生に目を向け言う。

黒鮪の隣に、必死で笑顔を作る海野先生が、奴のアシスタントをするのか…。あのアナウンサーさんが居ないせいか、激しく不安になった。

「はい、よろしく願いますー!」

明るく海野先生が、声を出すと…。

「いやあ…、海野先生はキュートですね…」

「やだあ、黒鮪先生、お世辞ですか？」

おおつ、よくやったぞ、黒鮪。番組が明るくなったぞ。

「お世辞では、ありませんよ…。海野先生は、可愛いです…」

「黒鮪先生ったらー」

容姿は、結構ビジュアルな黒鮪。だからか、海野先生も、ちょっとまんざらでもない様子。

いいぞ、番組が明るくなったぞー。

すると、黒鮪が…。

「でも…、深夜アニメ、『萌えッ子戦士モエサス』のホレサスの方が可愛いです…」

テレビから音声が途絶えた。

『萌えッ子戦士モエサス』とは…。

深夜帯放送のアレな内容のアレなテレビアニメーション。

知っている人は、知っている。知らない人は、知らなくていいアニメ。

このアニメの主人公、モエサスより、彼女のライバルであるホレサスの方が、ツンデレで人気なのである。

そんな、ホレサスの決め台詞…。

「貴様に、今日を萌える資格はねえ！！」

海野先生の顔から、笑顔が消え、どことなく『エクソシスト』の憑かれた少女を思い出させる怖い顔をした。片手に、包丁があったせいか、本気で怖かった。

「さて、今日の料理は『やきそば』です…」

空気を読まず、黒鮪は話を進める。

なんで、こういう時に限って、普通にやるんだ、こいつ…。

まな板の上で、黒鮪はキャベツを切る。
その隣で、怖い表情が固定したまま喋らない海野先生が居た。頼むから、テレビで殺人をしないでくれ…。
すると…。

ザクッ！

「わっ！」

黒鮪が、声を上げた。

どうやら、キャベツを切っている最中で、親指を切ってしまったようだ。

緊急事態らしく、海野先生が慌てた。

「黒鮪先生！大丈夫ですか…」

「大丈夫です…」

黒鮪の指から、血が流れていた。

うわぁ、生々しい…。まな板に血が飛び散ってる。

「止血を！」

海野先生が、スタッフに言い掛ける。

「大丈夫です…。こんなの舐めておけば、平気です…」

そう黒鮪は言い、切った親指を口に入れた。本当に、大丈夫かよ…。

チュパッ！ズルッ！チヨパッ！チヨパッ！

「…」

黒鮪は切った親指を、なんか嫌な音を出して、しゃぶる…。

えっ、親指をしゃぶる時って、こんな音出るっけ…。舐める仕草も、なんか嫌だった…。

海野先生の顔は、微動だにしない。強いて言えば、片手の包丁が、今にも、黒鮪を刺しそうだった。

チヨパツ！チヨパツ！

その卑猥な音だけが、テレビから流れ続けた。
もう十分間、黒鮪の指しゃぶりだった。
たまに…。

「あつ…、ああ…、あつ…あつ…」

と、クロマグロが快楽の声を上げていた。

僕は立ち上がり、机から葉書を取る。そして、こつ書いた。

『地獄に堕ちろ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981b/>

クロマグロ ～発動篇～

2010年12月31日02時45分発行